

「大学生心理学」という知の体系化に向けて(4)

— 大学生心理学の方法論的戦略 —

○奥田雄一郎

山田剛史

(中央大学大学院文学研究科) (京都大学高等教育研究開発推進センター)

Key words: 大学生心理学・内在的視点の分析への利用・方法論的多様性

【問題と目的】

大学生心理学とは「大学生自身の視点」「大学生固有の文脈」からのアプローチを目指した青年心理学の一分化体系である(山田・奥田, 2005a, 2005b; 奥田・山田, 2005)。大学生心理学では、第一に、従来の「大学生の心理学」のように研究者側の外在的視点から現象を捉えるのではなく、大学生自身の内在的視点のボトムアップ的抽出による現象へのアプローチを目指し、第二に、大学生を、彼らを取り巻く社会的・文化的・状況的文脈から切り離して考えるのではなく、むしろその文脈を分析に積極的に取り入れることによる大学生研究を目指す。

著者らは、これまでに従来の脱文脈的傾向の強い「青年心理学」や対象者が大学生であるというだけの「大学生の心理学」、実態調査的傾向の強い「大学生研究」といった諸研究を整理し、それらの問題点を指摘した。その上で、山田・奥田(2005b)では、大学生心理学の射程と青年心理学からの分化と再統合について論じ、また奥田・山田(2005)では、そのニーズと生涯発達心理学からのアプローチの可能性について論じた。本報告では、(3)において、「大学、大学生の範囲」「隣接学問、先行知見との接点」と「文脈」について、(4)において、大学生心理学の着目する「内在的視点」という概念について、また、大学生心理学の方法論的多様性について論じることを目的とする。

【内在的視点という大学生心理学の方法論的戦略】

先にも述べたように、従来の「青年心理学」、「大学生の心理学」、そして「大学生研究」などの諸研究においては主に、質問紙などを用いた外在的視点から、トップダウン的に大学生を取り巻く現象を理解・説明することが目的とされてきた。しかしながら、奥田・山田(2005)において指摘したように、それら従来の大学生へのアプローチでは、現代の多様化した大学教育、大学生、あるいは大学生を取り巻く社会によるニーズに十分に答えられていない。

それに対して、大学生心理学は、大学生ら自身がどのように大学という環境、あるいは大学という時間を経験しているのかといった視点からのアプローチを目指す。もちろん、これまでも事例研究や面接法による大学生の病理的側面の研究といったように、大学生の内的な世界を記述する心理学的試みはなされてきた。しかしながら、ここでいう内在的視点のボトムアップ的抽出とは、単に大学生らがどのように大学という環境、大学という時代を経験しているのかを実態調査的に記述することや、あるいはその事例を紹介することだけを目的とするものではない。むしろ、それらを研究のプロセスの中に組み込み、理論化することを志向する。

また、これまでも大学教育の実践場面においては大学生の内在的視点の重要性自体は述べられてきた。しかしながら、それらは心理学的に理論づけられたものではなく、むしろその重要性を主張することにとどまり、具体的にそれをどのように研究、あるい

は教育実践の中に取り込むのかについては研究がなされてこなかった。現代という時間を生きる大学生らの内在的視点を捉えることは、彼らとは異なった文脈に生きる教員や研究者にとっては非常に困難な営みである。そのために大学生心理学では、心理学的方法を用いて、大学生の内在的視点からのリアリティをボトムアップ的に抽出することを目指す。このようなアプローチの例としては、例えば溝上ら(2001)は、大学生に対するインタビュー調査を行い、大学生固有の意味世界へのアプローチを試みている。

【大学生心理学の方法論的多様性】

大学生心理学は、従来の外在的な視点からのトップダウン的な研究に対するアンチテーゼを主張するものであるが、それは例えば質問紙法とは用いない、といったような方法論的制限を設けるものではない。むしろ、量的/質的といった二項対立的な図式を超え、それらの多様な調査法、分析法のトライアングレーションを重視する。当然のことながら、面接調査によって得られた質的なデータを統計処理を行い量的に分析することも可能であるし、数量的データによって得られたカテゴリーを使って面接調査を質的に分析することもまた可能である。重要なのは、はじめに現象に対する調査方法を決定するのではなく、調査を行う大学生にかんする現象と、それに対する問いとの関係から方法を定め、その問いに応じて質的/量的な方法を循環的に用いることである。このようなアプローチの例としては、例えば尾崎(2005)や山田(2004)、奥田・半澤(2003)がある。

また、大学生心理学の研究プロセスにおいては、大学生は研究データの提供者であると同時に分析の参加者にもなりうる。彼らの内在的視点からの大学という環境、大学という時代のリアリティを捉えるには、調査によって得られたデータを大学生自身にフィードバックし、それらのデータに対して彼らがどのように捉えるのかといった研究や、あるいは研究という循環的なプロセスにおいて、分析カテゴリーの生成に大学生ら自身に参加してもらうことも重要だと考えられる。そのような方法論的議論を重ねることによって、従来の研究の知見に加え、さらに大学生の理解・説明が可能になるであろう。

【参考文献】

- 山田剛史・奥田雄一郎(企画ラウンドテーブル) 2005a 「大学生心理学」の構築—青年心理学と大学教育学の架橋— 第11回大学教育研究フォーラム, 24-25.
 山田剛史・奥田雄一郎 2005b 「大学生心理学」という知の体系化に向けて(1)—その独自性と青年心理学の視点から— 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 769.
 奥田雄一郎・山田剛史 2005 「大学生心理学」という知の体系化に向けて(1)—その独自性と青年心理学の視点から— 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 770.

(OKUDA Yuichiro; YAMADA Tsuyoshi)